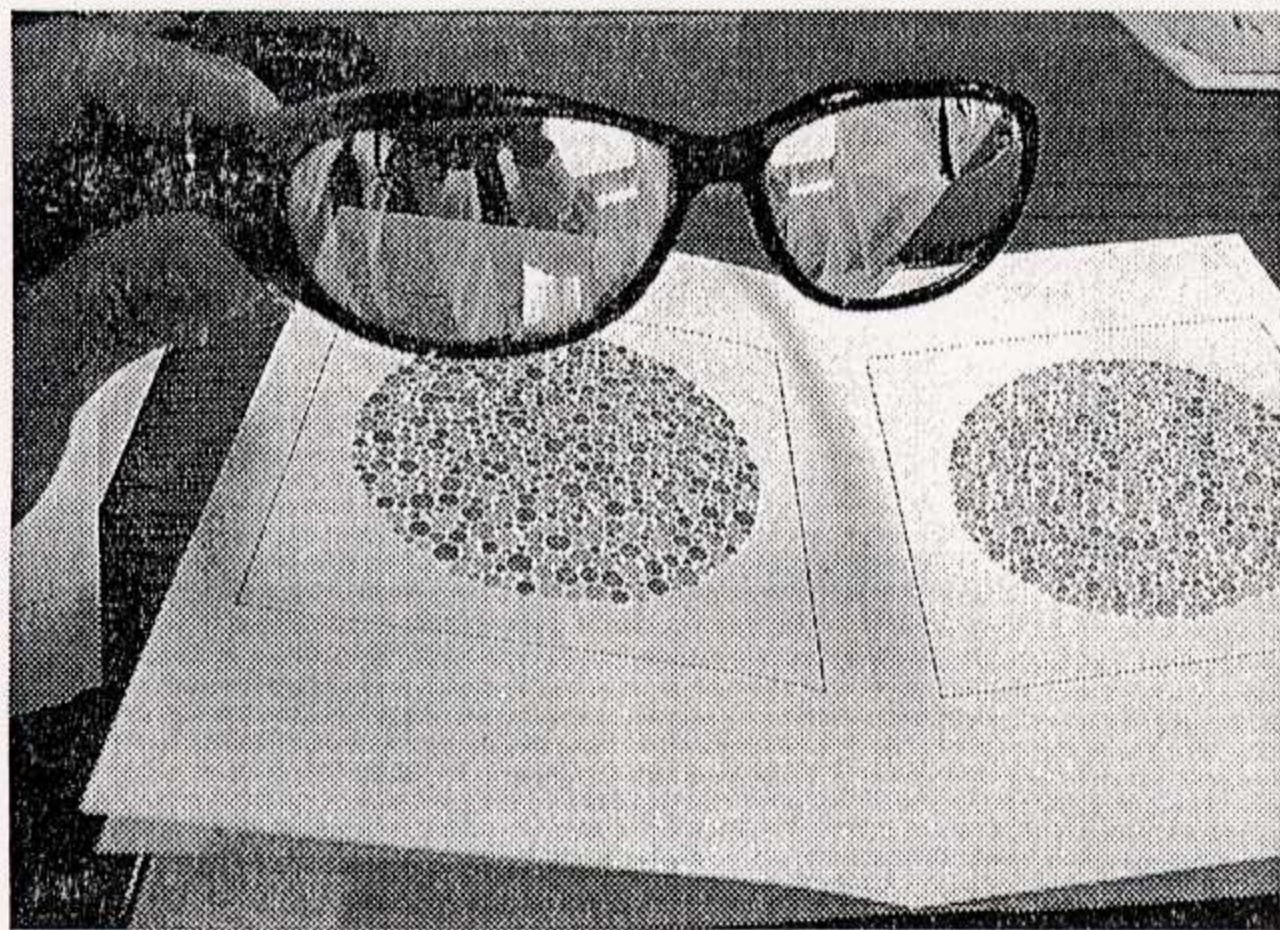


# 眼鏡で色覚異常を疑似体験



伊藤光学工業などが開発した色覚異常疑似体験眼鏡

## 伊藤光学工業

# 2 大学と共同開発

## 教育、UDなど活用期待

光学メーカーの伊藤光学工業（本社蒲郡市宮成町三、伊藤寛社長、電話05333・69・3311）は、色弱者（色覚異常者）と同じように物が見える眼鏡を開発した。同社と豊橋技術科学大学の中内茂樹教授と高知工科大学の篠森敬三教授が進めている、経済産業省中小企業地域新生コンソーシアム研究開発事業プロジェクトの成果。同プロジェクトが〇七年三月末までで終了するため、同社は来年度の上半期をめどに販売を始める予定。

（蒲郡・武石貢次）

八月四日にホテル日航豊橋（豊橋市）で開催される「視覚科学技術シンポジウム」で、松下電器産業が開発する白内障疑似体験ゴーグルなどと一緒に展示する。

色覚異常疑似体験眼鏡の基本設計は豊橋技術大、製造は伊藤光学工業、評価・検証は高知工科大が担当。正常に色を識別できる色覚正常者が装着することで、色弱者が感じている色の見分けにくさを体験して、表示物や画像のどんな情報が認知

しにくいかなどを理解するための道具。色弱模擬フィルターをビデオカメラに装着すると動画撮影も可能という。

教育現場での色覚異常の児童生徒に配慮した授業の進め方の研究や、色覚異常に配慮したユニバーサルデザイン（UD）製品づくりなどにも期待できる。

信号の色や道路標識、ハザードマップ（危険区域地図）上の危険区域の赤色などが識別しにくい

色覚異常者は、日本人男性全体の約5%いるとい  
う。  
伊藤光学工業などは今後、試作を繰り返し、より精度の高い色覚異常疑似体験眼鏡および色弱模擬フィルターを完成させる。眼鏡の価格は一つ三万円を目標にしている。